研修報告　Ｄ班２グループ　ワイルド恵ちゃん

世界に通用する人材育成・教育の実現

１．現状の問題分析

大学を取り巻く環境の変化は著しい。18 歳人口の減少が叫ばれる一方、大学の数は増え続けている。また、社会情勢はますます不安定となり、先の見通しが立たない時代が続いている。

そのような中で大学には、主体的に学び続ける力と、学んだことを活用できる応用力を持ち、予測困難な時代に立ち向かえる人材、ひいては世界に通用する人材を育成することが強く求められている。

このような社会の要求に応えて「選ばれる大学」へと成長するために、私たち大学人は不断の努力を重ねなければならない。

２．「選ばれる大学」になるには

選ばれる大学とは、受験生に選ばれることだけが目標ではない。国や社会、保証人などあらゆる人から選ばれることを目指すものである。そのために何をすべきか、二つのキーワードをもとに考察した。

① 情報公表

見たい人だけが見ることの出来る「公開」ではなく、全ての人を対象とした「公表」を目指すべきである。

現状では、大学の情報発信のありかたは表層的な広報活動の域に留まっており、本当に必要とされている情報が全ての人に開かれているとは言いがたい。しかし、例えば受験生に対しては多くの情報を提供することで、ミスマッチの発生を未然に防ぎ、彼らがより具体的な夢や目標を伴った学生生活をデザインする手助けが行えるようになる。また、国や保証人から補助金や学費をいただいている以上、説明責任を果たすため社会に向けて広く情報を発信する義務が発生する。以上の事由から情報の「公表」が必要とされるのである。

「公開」から「公表」へと転化する具体的な手段としては、Web サイト上のリンクを活用して、興味のある情報を辿れるようにすることや、誰もが容易に情報を参照できるようにアクセサビリティを向上すること、データをわかりやすく視覚化し、画像や動画で視える情報を提供することが挙げられる。これらは全て ICT の活用により実現可能である。

当然のことながら、これらは全て、正しい情報を責任持って提供することが前提となる。

② 学士課程教育の質的転換

従来の受動型の講義だけでは学生が主体的に学ぶ力を身につけられるとは言いがたい。主体的に学ぶ力を育むためには能動型の教育を充実させることが求められる。能動型の教育は学生と教員、学生と学生など、それぞれが双方向に働きかけ、成功と失敗を繰り返しながら学修を進めることを理想とする。成功体験は学修の動機づけに繋がり、失敗体験からは試行錯誤の中で気づきを得ることが出来るため、いずれも学生の成長に繋がる。

具体的にはグループディスカッションなどを多くの授業で取り入れる。チームで試行錯誤を繰

り返しながら目標に向かって取り組むことで、社会人基礎力が磨かれていく。

また、能動型の教育のために ICT を活用する例としては、Moodle などのフォーラム機能を通じてコメントの共有や評価を行うことなどが挙げられる。

他にも、授業で学生にファシリテーターなどの役割を与えることや、学校運営で学生の意見を取り入れることで、学生に多くの気づきを与えるきっかけになることが期待される。

３．職員はいかなる役割を果たすべきか

①「教職員協働+学生」の実現

学校教育の現場で教職員協働という言葉はよく聞かれる。その協働のサイクルの中に学生を加えることで、学生からの要望が教員に伝わりやすくなり、授業の質の向上への展開が期待される。学生も主体的に学修に取り組む経験を得ることが出来る。その際、職員は教員と学生の間に入ることで、それぞれの要望を聞きながらサポートする。また、学生に対しては評価をフィードバックして、彼らの意欲を高める必要がある。そういったサイクルを通じて学生の学び続ける力、主体的に考える力を育成する大学への成長を目指す。

②　「全ての業務は教育に通じる」という意識を持つ

自分たちの行っている業務の全てが、教育や学生に通じているという意識を持って業務に取り組む。情報公表は広報や教務など一部の部署が主に関わるものだというイメージが抱かれがちだが、情報は私たち一人ひとりの業務の上に成り立っているということを見失ってはならない。そして、それらの情報を管理し大学の運営・向上に役立てていくことも私たち職員の役割である。

４．まとめ

我々のグループは、「世界に通用する人材育成・教育の実現」というテーマを設定したが、その実現のためにはまずは一人ひとりが目の前の業務に取り組むことが大事なのだということを伝えたかった。教職員の力に学生の力を加えて、選ばれる大学を目指すことで、それぞれの大学の力が上がり、大学の力が上がることで国力も上がり、国力が上がることで世界に通用するような人間が育つ。そのようなスケールの大きな育成に携われる仕事に就いていることに誇りを持ち、「全ての業務は教育に通じる」という気持ちを常に意識しながら、日々の業務に励みたい。